

日本遺産 播但貫く、銀の馬車道 鉱石の道



日本鉱業近代化の礎
分水嶺を越え、北へ24km。

① 生野鉱山関連遺構
(生野鉱山及び鉱山町の文化的景観)



明治元年に政府の直轄となり、最新技術が投入された日本の近代鉱山第1号。銀の馬車道の終着点で、近代化に伴う遺産がまのあたりに残り、明治に造られた製錬工場が現役で稼働している。
[文化財の所在地] 朝来市

② 生野鉱山町
(生野鉱山及び鉱山町の文化的景観)



採掘に関連する役人や商人、鉱夫が生活した鉱山町。屋根に生野で作られた赤瓦を葺き、基礎や堀に製錬後の不用品を方形に固めた「カミ石」を用いた建物が、独特の風景を形成している。
[文化財の所在地] 朝来市

③ 生野鉱山寮／馬車道跡



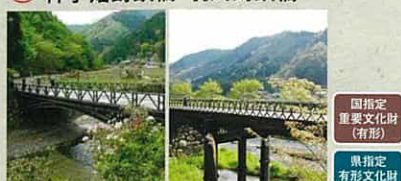
生野・姫路間49kmを最速で結ぶ日本初の産業専用道路として、明治9年(1876)に完成。「銀の馬車道」として親しまれている。
[文化財の所在地] 朝来市・神河町・市川町・福崎町・姫路市

④ 飾磨津物揚場跡



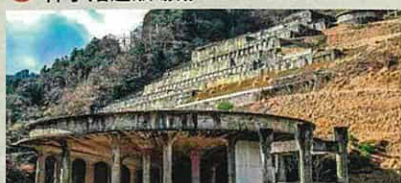
銀の馬車道の発着点で、生野鉱山の物資を専用に扱った貨物港。馬車道に伴って造られ、レンガ製倉庫や港湾護岸が残る。
[文化財の所在地] 姫路市

⑤ 神子畑鑄鉄橋・羽瀧鑄鉄橋



生野と神子畑鉱山を結ぶ鉱石の道に架けられた鉄橋。神子畑鑄鉄橋は全鋼鉄製の橋梁として日本最古。羽瀧鑄鉄橋は二連アーチ橋で、神子畑鑄鉄橋と様相が異なる。
[文化財の所在地] 朝来市

⑥ 神子畑選鉱場跡



元々は鉱山だったが、大正6年(1917)からは、明延鉱山の鉱石を選別する施設として稼働。東洋一の規模を誇った。
[文化財の所在地] 朝来市

⑦ 旧神子畑鉱山事務所(ムセ旧居)



明治5年(1872)生野鉱山に招かれた外国人技師の官舎として建てられ、その後明治21年(1888)神子畑に移築され、鉱山事務所として利用された。
[文化財の所在地] 朝来市

⑧ 馬車道修築碑



明治9年(1876)の銀の馬車道完成を記念して建てられた。道を造る経緯や意義、経過が記され、困難であった工事の様子が克明にわかる。
[文化財の所在地] 姫路市

⑨ 辻川町



銀の馬車道沿いにある宿場町。東西南北の街道が交差する地点で、馬車道の物資中継の拠点となった。
[文化財の所在地] 福崎町

⑩ 三木家住宅



辻川組を治めた大庄屋の屋敷跡。江戸時代中～末期に造られたが、銀の馬車道建設にあたって宿場町の中央を道が通るよう、屋敷地の一部を提供した。
[文化財の所在地] 福崎町

⑪ 明延鉱山明神電車



明延鉱山と神子畑を結ぶ鉱山鉄道。昭和20年(1945)から客車が運行され、運賃から「一円電車」の愛称で有名になった。
[文化財の所在地] 朝来市・養父市

⑫ 明延鉱山関連遺構・明延鉱山町



錫・銀・銅を採掘した鉱山で、採掘を休止している今も、盛んな採掘で掘られた坑道跡が多数残る。ふもとには鉱夫住宅、銭湯、映画館跡など鉱山関係者の暮らした町並みが残る。
[文化財の所在地] 養父市

⑬ 中瀬鉱山関連遺構・中瀬鉱山町



西日本最大の金山。明治時代、生野鉱山とともに官営化され、現在も鉱山関連の工場が稼働し、鉱山に関わる町並みが残る。
[文化財の所在地] 養父市

⑭ 屋形町



銀の馬車道沿いの宿場町。江戸時代からの宿場町で、当初計画では馬車道のルートからは外れていたが、嘆願書を提出して道が通った。
[文化財の所在地] 市川町

⑮ 中村・栗賀町歴史的景観形成地区



銀の馬車道沿いの宿場町。生野の玄関口として、鉱山に必要な物資を搬入基地の役割を担った。
[文化財の所在地] 神河町

⑯ 竹内家住宅



栗賀町にあるお茶問屋の邸宅跡。日本茶は需要が高く、製造販売した「仙雲茶」は京都宝鏡寺の宮様にも献上され、良質の茶として広く知られた。
[文化財の所在地] 神河町

公式
パンフレット

日本遺産
播但貫く、銀の馬車道 鉱石の道
(資源大国日本の記憶をたどる73kmの轍)



STORY

The Old Silver Mine Carriage Road and Road of Ore:
Bantan's Industrial Heritage Route,
Memories of Resource Rich Japan

日本遺産「銀の馬車道・鉱石の道」推進協議会(事務局)
〒670-0947 兵庫県姫路市北条1-98
兵庫県中播磨県民センター
県民交流室 産業観光課(銀の馬車道担当)
TEL. (079) 281-9034



<http://wadachi73.jp/>

表紙題字 書家 前田華汀



熱き時代の志が拓く
飾磨～生野、49kmの道程。

「播但貫く、銀の馬車道 鉦石の道」 ～資源大国日本の記憶をたどる73kmの轍～

播但を貫いて鉦山群へと向かう旅。

鉦山まちが放ついぶし銀の景観と生活の

今昔に触れながら明治～大正～昭和へと連なる

時の足跡を辿る旅路。



用する大規模坑道、水銀を使った製錬など多くの最新技術が導入されました。「史跡生野鉦山」では中心坑道が公開され全長約1000mの近代鉦山を体感することができます。また、生野の町には鉦山社宅をはじめ、鉦山町の繁栄を伝える町家が整備されていて、散策をしながら鉦山まちの暮らしを偲ぶことができます。鉦夫の滋養のために栽培され、のちに日本三大ねぎのひとつとなった「岩津ねぎ」や鉦山町の人気料理であった「ハヤシライス」も楽しい旅の趣となっています。

共同浴場だった建物や寺社など、往時の佇まいが残されていて、時を超えた趣深い風景の中を散策することができます。また、総延長550km、地下1,000mの奥底へとつながる明延鉦山の一部は「明延鉦山探検坑道」として公開されており、坑内には大寿立坑跡、車両系鉦山機械、削岩機、1トン鉦車などが当時と同じ姿で展示・公開され、近代鉦山の迫力を肌で感じることができます。

そうして鉦石の道はさらに北へと続き「鉦山が生んだ南北73kmの道」の終着点、西日本最大の金山、中瀬鉦山に到着します。明治時代に生野とともに官営化された中瀬は、昭和に入って近代化が進み、一時期には日本最大量の金鉦石を採掘するにいたります。この中瀬鉦山で選鉦、分離した金もまた、生野・姫路を通して飾磨港へと運ばれ瀬戸内海に浮かぶ香川県の直島製錬所でインゴット(地金)になりました。現在中瀬には鉦山に関わる街並みが残る「中瀬金山関所」という鉦石を展示した交流館もあります。

飾磨港と生野・神子畑・明延・中瀬の鉦山群を結ぶ「銀の馬車道」「鉦石の道」は、明治時代に出現した生産から輸送・物流に及ぶ「海と山を結ぶ鉦業コンビナート」でした。この道には、多く・速く・遠く運ぶための思想と先端技術が詰め込まれ、近代化に舵を切った鉦山経営の仕組みがほぼ完全に残されており、その姿は現在の暮らしを支える「ものづくり」の始まりの様子を示しています。

播但貫く73kmの轍をたどる道程は、日本を鉦物資源大国たらしめ近代化を推し進めた先人の国際性と革新の気質に触れる旅。金・銀・銅を求め往き交った人々の交流から生まれた多彩な生活と文化に出会う旅です。産業遺産と自然の織りなす絶景を巡り、その地に脈々と連なる息吹を体感する物語は、時の静謐の中で、その扉を開く来訪者を待っています。

近代化を牽引した軌跡 “鉦石の道”をゆく

「羽瀝鉄橋」「神子畑鉄橋」を過ぎて行き着く神子畑選鉦場跡は、階段状の巨大構造物やインクライン、円錐型のシクナーなど、迫力の大パノラマで来訪者を圧倒します。また、鉦山事務舎として使用されていた当時の建物(ムーセ旧居)も公開されており、館内では神子畑選鉦場の歴史や模型などさまざまな展示を見ることができます。

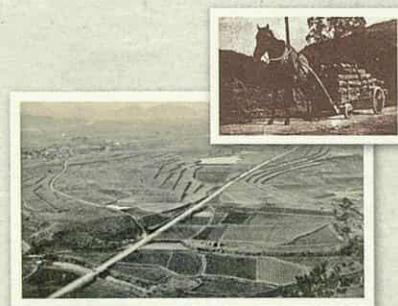


昭和の初めの頃、神子畑と明延の間には明神電車という鉦山鉄道が建設され、鉦石を運搬する合間に「一円」という日本一安い運賃で町に暮らす人の足として使用されました。「一円電車」は現在も保存され、明延では当時の車両を使った復活運行を定期開催中です。町には鉦山社宅や協和会館、

鉦山が生んだ南北73kmの道

兵庫県の中央部播但地域を南北に貫く一本の道。飾磨港から生野、さらに中瀬に連なる全長73kmのこの道は、鉦山の採掘・製錬に必要な機械や日用品などの物資と産出された金・銀・銅鉦石を輸送するルートとして整備され、多くの人びとや馬車が盛んに行き交いました。

道程には、鉦山と共生した宿場町や町家が次々と現れ、生野には今も稼働する金属工場から操業の音と製錬の匂いが放たれ「鉦山のまち」の活力を感じることができます。



道は生野から北へと続き、神子畑・明延・中瀬の鉦山にいたります。想像を絶するほどに地中深く掘られた坑道からは、金・銀・銅を求めた鉦夫たちの息遣いが聞こえてくるようです。

瀬戸内の港町から “銀の馬車道”をゆく

日本初の高速産業道路といわれる“銀の馬車道”(正式名称:生野鉦山寮馬車道)は、誕生間もない明治政府の官営事業として、お雇い外国人ジャン＝フランソワ・コワニエの指導のもと、レオン・シスレーを技師長に、初代生野鉦山局長朝倉盛明の指揮により、マ



宿場町(栗賀町)を通る銀の馬車道

カダム式舗装を始めとするヨーロッパの最新技術を導入。3年間の突貫工事を経て明治9年に完成しました。

田園風景の中を続く道程、印象的な街並み。中継拠点となった福崎町の辻川町、大庄屋「三木家」が屋敷の一部を馬車道に提供したことや、民俗学者の柳田國男との関わりと逸話。舟運基地として栄え、最初ルートから外れていた市川町にある屋形町の住民が政府への嘆願により馬車道を通して町を衰退の危機から救った秘話。神河町の福本藩陣屋。鉦山への搬入基地の役割を担った栗賀町。毒消しとして盛んに飲まれた仙霊茶を製造・販売したお茶問屋「竹内家」の佇まい。そのどれもが明治時代の賑わいと躍動を感じさせます。

日本の近代化における原点 「銀のまち～生野」

道程の中盤、神河町にある、唯一馬車道が当時の面影をとどめ、実際に見て歩いて当時を偲ぶことができる「現存する馬車道跡」と道の

駅「銀の馬車道・神河」を過ぎて生野峠を越えると清流市川に沿って集落が開けます。開坑1200年の歴史を誇り、かつて“佐渡の金・生野の銀”と言われた鉦山のまち生野です。赤みがかった生野瓦の屋根、格子に意匠凝らした町家、鉦物の残渣を石状に固めた「カラム石」を石垣・土台に使うなど、鉦山まち独特の景観をとどめる口銀谷地区を抜けると、生野鉦山本部の置かれた工場に到着します。



明治元年に政府直轄の官営鉦山となった生野には近代化を先導する模範鉦山として、動力の機械化、火薬による採掘、トロッキを利



中瀬鉦山の外ロッキ